

人生からの問いかけに応えよー自殺は一つの応えかー

概要

ヴィクトール・フランクルの実存思想を手がかりに、「人生の意味とは何か」ということについて論じる。そして、そこから自殺についてどのようなことが言えるかを検討する。

現段階での内容

第1章 人生の意味とは何か

1.1 「かけがえのなさ」と「責任」

人生の意味とは何かという大きな問いに答えを与えるにあたり、まず、ひとりひとりの人間を特徴づけ、かつひとつひとつの存在に意味を与える一回性と唯一性について検討する。フランクルによれば、各個人の「かけがえのなさ」、つまり一回性と唯一性の自覚と、それゆえにその人が担っている「責任」の自覚は、その人の存在理由すなわち「人生の意味」の中核をなすものである。

フランクルの言う「かけがえのなさ」は、未来に自分を待っている何かがあるということ、すなわち自分が応答すべき他者や何か自分以外のものが自分を待っているという、他者との関係におけるものである。つまり、私は他者との関係において「かけがえのない」ものであり、それゆえに「責任」をもつ、というのがフランクルの主張である。この「かけがえのなさ」と「責任」の自覚こそが、われわれ人間が様々な困難に耐え、乗り越えてゆくために必要不可欠な要素である。

以上のことから、フランクルの述べる「かけがえのなさ」と「責任」は、「未来」に応えることであると言える。しかしここで、私は、自分の人生における「過去」と「現在」を引き受けるという意味での「かけがえのなさ」と「責任」もまた存在しうると考える。過去と現在を引き受け、また未来に応えるという「かけがえのなさ」を意識することで、「他の誰でもない私が、過去も今も未来も、人生のすべてを引き受けるのだ」という「責任」を自覚するに至るのだと考える。

1.2 「人生に意味があるか」という問いの誤り

自分の存在の「かけがえのなさ」を意識し、それゆえに生じる「責任」の重さを自覚したとき、われわれは、「私は人生になにを期待できるか」と問うてはいない。むしろ「人生は私になにを期待しているか」と問うているのである。これが、人生の問いのコペルニクスの転回とフランクルが述べているものである。われわれが「生きる意味があるか」と問うのではない。むしろ人生の方こそがわれわれに問いを提起している。生は与えられたものではなく、課せられたものなの

である。このことから、生きることは、困難になればなるほど意味あるものになる可能性もあるということが明らかになるだろう。

1.3 人生の意味の成就

生きる意味の問題は、各人に固有の具体的な時と場において問われるのでなければならない。それに対して、一般的な人生「というもの」の意味「というもの」を問う場合、それはこの私の、そのあなたの、個々の人生の意味を問うていることにはならない。各人の人生が出す問いは、具体的に、各人の人生において問われなければならないのである。

各人の人生において待ち受けている具体的な要求に対する応え方として、フランクフルは次の三つの価値をあげる。

①「創造価値」

これはなにか活動をしたり、創造したりすることで実現される。この価値を実現するにあたり、その人がなにををして暮らしているか、どんな職業についているかなどは問題ではない。むしろ重要なことは、自分の仕事、自分の活動範囲においてどれほど最善を尽くしているかということだけである。

②「体験価値」

われわれは活動や創造によってだけでなく、なにかを愛しそれに身をささげることによって、人生の様々な要求を満たすことができる。この価値は、なにかを体験することや、自然、芸術、人間を愛することによって実現されるものである。

③「態度価値」

以上のどちらの価値の実現の可能性からも閉め出されているような場合でも、なお「態度価値」は実現可能である。われわれは、苦悩することによって人生を意味あるものにできる。自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどのような態度を取るかということによって実現されるものである。

第2章 人間の根本意志である「意味への意志」

2.1 「快楽への意志」

この言葉でフランクフルが考えているのは、フロイトの衝動的無意識である。フランクフルはこの立場を「生理学主義」と呼び、ここでは生理的欲求の中でも特にリビドーが重視される。リビドーとは、フロイトによれば、性本能を発現させる力の意味であり、快楽の獲得を目的とする。

2.2 「力への意志」

この言葉によってフランクフルが考えているのは、アドラーの個人心理学の立場である。人間が社会的存在として様々な人に取り囲まれることによって、自己と他者との比較の意識が生じ、優

劣の感情を抱くようになる。そして、この劣等感を克服し、他者に優越しようとする。

2.3 「意味への意志」

この「意味への意志」は、実存的欲求である。「快樂への意志」と「力への意志」は、生きるためのもの、つまり生きる手段の追求であった。またこの二つは、動物と共通の欲求である。それに対して「意味への意志」は、生きるのは何のためか、という生きる意味、目的の追求であり、人間独自の欲求である。そのため、この意志は人間の根本意志であると言える。

今後の流れ

第 2 章で論じた「意味への意志」を満たすためには、第 1 章でも述べた人生の意味についての問いのコペルニクス的転回をすることが必要である。そのための具体的な方法が、「創造価値」「体験価値」「態度価値」の三つの価値の実現である。それらの価値について、第 1 章では大まかな概要を書いたが、第 3 章で再び取り上げてさらに内容を充実させたい。それぞれの価値実現の具体例をあげること、また、三つの中でも特に「態度価値」についての考察を深めたいと考えている。

副題にある自殺については、第 4 章で論じる。第 3 章までで論じていく فرانクルの人生の意味論を手がかりに、自殺についてどのようなことが言えるかを検討していく。フランクル自身は、自殺については否定的な立場であり、自殺は無意味なものであると述べている。人生はどんなときも意味を持つことが可能であり、人生のそれぞれの瞬間に意味を実現することは、われわれの責任である。そのため、命を捨てることは、決してなんらかの問題に対する応えではない。しかし私は、それでもなお、人生の意味の成就としての自殺はあり得るかということを検討していく。